

# 億を稼ぐ トレーダーたち

日本版マーケットの魔術師たちが語る成功の秘密



林 知之

## はじめに

### ○きっかけは『マーケットの魔術師』というアメリカの本

本書は、日本のスーパートレーダーともいべき人たちの成功哲学を紹介するものである。しかも全く表舞台に出ていないトレーダー、あるいはほとんど知られていないトレーダーばかりで構成されており、その考え方にふれることができる本書には十分な価値があると確信する。

日本の社会では、個人プレーが否定される傾向がある。また突出した成功がヒーロー視されず、ねたみやそねみの感情から「悪」とされるくらいの空気がある。だから相場の世界の成功者など、とても受け入れられないという風潮がある。たとえ受け入れたとしても、とてつもなく特殊な世界の人物を遠くから観察するような視点しかないようだ。

結果として、どうなっているのか――。難解な問題に挑戦する受験勉強のごとく、「正解は何か」という相場の世界ではまっ先に否定されるべき観点に多くの人が染まり、予測が当たったか外れたかという意味のない結果論に終始している非現実的な世界が、個人投資家に与えられた唯一の情報源となっているのだ。

この本で紹介するトレーダーは、そんな非現実的な世界とは無縁の、成功している本物の実践者たちである。

相場の実践者にインタビュするというアイデアは、パンローリング社が翻訳版を発行している『マーケットの魔術師』というシリーズ本が元になっている。著者であるジャック・D・シユワッガー氏が多くのトレーダーから話を聞き、トレード手法やこだわりを紹介するという内容である。シリーズの中の『新マーケットの魔術師』が1999年に清水昭男氏の翻訳で発行された時に私は、相場用語のチェックを中心に翻訳を手伝った。その時、日米の相場文化に大きな違いがあることを痛感すると同時に、日本人を相手に同じようなインタビュができないかと考えた。そして周囲には、同じ意見の持ち主が何人もいた。

ところが当時は、「相場でメシを食っている」などと言うと、「うさんくさい」としか思われなような状況で、もちろんトレーダーという言葉も広まっていなかった。個人的に売買して利益を上げている人が表に出ることはほとんどなかったし、業界の仲間に声をかけても簡単に紹介してもらえない可能性は皆無としか感じられなかった。結局、「日本版マーケットの魔術師」という構想は手つかずのままだった。

しかしその後、ちよつとしたきっかけから、私が運営している林投資研究所で発行している『研究部会報』という定期刊行物に、個人投資家のお手本として紹介したいと思う人物のインタビュを執筆したところ、予想以上の好評を得た。また時代も変化し、マーケットの成功者はヒーローで

ありあこがれであるといった認識が、日本の社会にも生まれてきた。こうして、「日本版マーケットの魔術師」の企画があらためて動き出したのである。

### ○優れたトレーダーとのインタビュは楽しい

そして現在も『研究部会報』にインタビュの連載を続けているが、インタビュを通じていろいろな人のいろいろな考え方にふれることが純粹に楽しく、本にすることなどすっかり忘れていた振り返れば、そんな感覚でいたことが功を奏したのではないかと思うのだが、相場に対するアプローチが全く異なっているだけでなく、「林さんの考え方は違うのでは？」というように自分の意見を遠慮なく語ってくれるような人も含めて多くのトレーダーに出会い、インタビュにに応じてもらった。

最初にインタビュを行ったのは、2007年11月だった。本書に掲載の杉山晴彦氏である。それ以降も、私の周囲で「この人ならば」と感じるトレーダーにインタビュをお願いしたり、業界内部の知人が推薦してくれる人物を紹介してもらってインタビュを続けてきた。本書を上梓する段階での最後のインタビュイーは、秋山昇氏である。本書への掲載順序はインタビュの順序とは異なるが、それぞれに時期を特定する表現を加えてあるので、混乱することはないはずである。

この企画が始まるまでの私は、インタビューを原稿にするといった作業をしたことがなかった。そんな私が直感的に思ったのは、「とにかく本音を話してもらわないと、価値のある読み物になり得ない」ということだけだった。私はシナリオを固定するようなことを嫌い、あえて事前に質問集を用意したりしなかった。インタビューイーが軽くお酒を飲みながら、自由に楽しく語ってもらえる場をつくりたいと考えたのである。

狙った通りの効果があったようで、録音した会話をあとで聴くと、インタビューイーが熱くなつて夢中で話してくれていることを実感した。私自身も話し好きなので、お互いに相手を抑え込みながら語ろうとしている部分も少なくない。そんなことを発見しながら自分の姿勢を反省しつつも、とにかくテープを聴きながら原稿を仕上げるという少々ややこしい作業が、楽しくて仕方がなかった。またインタビューを受けてくれたトレーダーからも、「あれ、私、こんなことしゃべっていたんですね」とか「あんなに断片的に話しただけなのに、言いたいことがきちんとまとまっている」といったうれしい評価をもらうことが多い。単行本としてまとめるために原稿を整理しながら一人一人の感想を思い出し、とても楽しく原稿を読み返している。読者も、インタビューの光景を想像しながら、楽しく読んでほしいと願っている。

この本をまとめる時点で、インタビューを受けてくれたのは合計9人だ。インタビューしてから時間が経過しているトレーダーもいることから追加インタビューを申し込んだ。名前を売ろうとしている人たちではないので全員はムリだったが、彼らのうち約半数の人に追加インタビューを行い、その内容も巻末に掲載してある。併せて読者の役に立てば、何よりである。

最後に、特別な利益にはならないのにインタビューを受けてくれたトレーダーのみなさんに、あらためて感謝の意を記したい。

また、この本の出版を後押ししてくれたマイルストーンズ代表の細田聖二氏をはじめ、『研究会報』の編集・校正を通じて数々のアドバイスをくれた林投資研究所スタッフ、そして本物の実践者たちを紹介してくれた業界関係者のみなさんに、心からお礼を申し上げます。

2011年5月

林知之

## この本の読み方

### ○偏りこそが長所を生む

冒頭では個人投資家が一般的に得られる情報について、否定的に述べた。しかし80年代のバブルが崩壊して以降、それまで画一的だった相場本の世界に、個別の手法を論理的に解説したものが増えたというのも事実である。

インターネットが普及した現在、特定のことについての情報がすばやく手軽に手に入るようになった。ところが、便利さの裏には大きなマイナス要因が存在する。情報がブツ切りであり、個々の情報について発信者の意図や背景が不明瞭であることだ。その点で単行本は——その本がきちんとした手順で作られていればだが——、一冊読み終えるまでその著者の世界にどっぷりと浸かることができる。自分のあり方や自分の目的がきちんとあれば、その著者の世界に取り込まれる心配はなく、その著者の世界を垣間見ることが出来る。世の中には、誰にでも役立つ平均的なものとか、誰にでも有用な最大公約的な情報など、あるはずがない。そんな姿勢でつくった情報は、馬に聴かせる念仏<sup>①</sup>以下のものだろう。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

やはり、偏っていることに情報の価値があるものである。偏っているからこそ、そこに独自の視点や観点があり、それを基準にして評価が下され、時間をかけて耳を傾けるべきオリジナリティーが生まれると信じている。書籍の価値というのは、こんなところにあるのだと思う。

### ○相場技術論の視点

この本に登場するのは、それぞれが別々の相場哲学を持った、それこそオリジナリティーあふれる独立したトレーダーたちだ。しかし、著者である私を持っている価値判断基準が一種のフィルターとなって本書が仕上げられているという事実を、読者に理解しておいてもらわなければならないと思う。

私は、中学生の時から始めた相場の経験から独自の考え方を積み上げてきたが、そのベースとなっているのは「相場技術論」である。相場技術論とは、相場を行う際の考え方のひとつである。

相場は、予測不能の世界だ。将来、価格がどのように変化するのは、タイムマシンが発明されない限り知ることができない。しかしこういう原則の中、「どこまで予測が可能か」という挑戦が繰り返され、一時的に発生するルールから普遍的な法則まで、さまざまな議論が展開されている。そんな状況下、大昔から職人的な相場師の間で基本とされてきた考え方が、相場技術論なのだ。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

相場技術論は、「将来の価格を知ることにはできない」という原則を素直に受け入れる立場の考え方である。すなわち、予測の面で努力してもムダであると結論づけ、そこから「では、どうすれば儲かるのか」を考え始めるのだ。結論として、「相場の変化に対してどんな行動を取るのか」がメインのテーマである。予測不能の株価を予測することは否定していないが、当てるための予測ではなく、その後の変化を自分自身の手で評価し、自分自身で次の一手を決めるための基準としてのみ予測を利用するのだ。つまり、予測を当てるだけで利益を上げることが放棄し、変化を見ながら出進退を決めることに徹するのである。ポジション操作の技術が重要だという核の考え方は、資金全体の管理、自分の弱さを認める姿勢、気持ちをリセットするために意図的に休みをつくる工夫など、多岐な方法論に広がっていく。相場技術論の考え方は、情報が氾濫する現代であらためて必要性が認められ始めた「セルフコントロール」であると私は考えている。

この相場技術論という「窓」を通じてさまざまなトレーダーの理論や哲学を紹介しているのが、この本の大きな特徴だ。「ここで買いました」「ここで売りました」「〇〇万円儲けました」といった個人の日記のような話を嫌う、まさに相場に対して一言ある人たちが、自らの成長と成功の過程を思い出しながら信念を語ってくれた――。これは私自身にとって最高の喜びであるが、同時に、これから売買を始めようとする人から長い経験を持つベテランまで、株でも商品先物でもFX取引でも売買対象を問わず、また長期・短期を問わずどんな手法を利用している人でも、あらゆる投資家・投機家にとって非常に有益な内容だと信じる。

また、本書は頭から順に読み進める必要はない。「はじめに」にも書いた通り、それぞれに時期を特定する表現を加えてあるし、それぞれが完結している。だから、興味を持ったトレーダーからひとつずつ読んでもらいたい。そして実際に成功しているトレーダーたちの論理を、読者それぞれの観点を加えて楽しんでほしいと思う。

読者一人一人がこの本の情報を成功への糧として、有意義な売買活動を展開してもらいたいと願っている。

はじめに／この本の読み方

**柳葉輝** こだわりを捨てて答えを見つけ、10億円の資産を形成したシステムトレーダー

「人間は相場で損するようにはできていないのです」

1. 大同毛織でやられた
2. パラジウムから日経225先物、再び商品先物へ
3. 創造性が損を生む
4. 3日間で1億7000万円の損!
5. 私にとって、相場は難しいものです
6. シンプルなルールが良い
7. 何もやらないのがベストかもしれない

**渡辺博文** 個人投資家時代にビジネスモデル投資という手法を確立した、異色のファンドマネージャー

「本当の美人を見分けろ」

1. サラリーマン留学
2. 私は作家です
3. 本当の美人を見分ける方法
4. 判断基準の大切さ
5. 株式投資のコストパフォーマンス
6. マーケティングの重要性
7. 渡辺流ポートフォリオ
8. 投資家魂

**杉山晴彦** 意地を張らない売買で、5カ月5099.88%の収益を達成した学習塾経営者

「すべてはマーケットの都合に従うだけです」

1. 失敗を重ねながらも勉強を続けた
2. 先物チャンピオンシップ優勝
3. 完全なシステム売買に臨む
4. 勝つための条件
5. 今後の課題など

**綿貫哲夫** 値動きの背景を探ることによって、10年以上勝ち続けるヘタラントレーダー

「私にとってマーケットは常に勉強の場なのです」

1. 値動きにかかわる「人」が気になる
2. 何にでも食いつく新人類ディーラー
3. 実需不在の丁半バクチ
4. トレーダーとしての自分

**成宮宏志** 理論と感性を融合させて結果を出す、元為替ディーラーのFAI投資法実践者

「守・破・離」「チャートを見てマーケットの声を聴くのが楽しい」

1. 学問ではわからない
2. メンタル面をコントロールするカタチ
3. 守・破・離という道
4. ONとOFF
5. 楽しみながら「投資道」を極める

**西村正明** 理論の裏付けによって負けない売買を繰り返す、プロップファームのブレイキングマネージャー

「おもしろみのない地味な売買でマーケットのゆがみを拾う」

1. 夢を持って商品業界に入った
2. 負けないトレード
3. おカネの怖さを知っておカネの世界に惹かれた
4. 理論の裏付け
5. 商品業界の未来
6. 個人に大切な夢とは

**橋田新作** 勉強した知識に長い経験を加えてついに成功。2年間で1億円以上稼いだ孤高の個人トレーダー

「相場はいつでも失敗の連続です」

1. 株で全財産を失い離婚
2. FAI投資法から為替のトレードへ
3. 限界を知ること
4. 失敗の歴史が大切
5. 死ぬまで相場を続けたい

**高橋良彰** 17年間、月間で1人もマイナスを出していないプロップチームをつくりあげた男

「チームで100億円の利益を積み上げてきた。大切なのは人のチカラだ」

1. 相場には精神力が必要なのか
2. アナログで行う、サヤのサヤを取るサヤ取り
3. 縮みつつある商品先物市場の中で
4. 人のチカラ

**秋山昇** 綿密な検証と大胆な行動——理想の二面性を持つ個人トレーダー

「累計利益5億円達成で牛井に半熟卵をつけるようになりました」

1. 徹底した検証と実践の仲間
2. あと1日で破産していた
3. おカネが欲しいわけではない
4. もう勘弁してください
5. あらためてシステムトレードを研究する

追加インタビュー

柳葉輝 304 / 西村正明 & 高橋良彰 312 / 杉山晴彦 320 / 綿貫哲夫 326

# 柳葉輝

(専業個人トレーダー)

こだわりを捨てて  
答えを見つけ、  
10億円の資産を形成した  
システムトレーダー

「人間は相場で損するように  
できているのです」

サラリーマン兼トレーダーという立場から専業トレーダーとなって10億円の資産を形成した、柳葉輝氏(仮名)。彼は、独自のコンピュータプログラミング技術を駆使してトレードしている。基にあるのは単純な発想だが、実際に使用しているプログラムは驚異的なものではないかと思う。単にエントリーとイグジットのシグナルを出すだけでなく、注文の執行までこなすシステムに仕上げ、人間の発注能力をはるかに超える売買頻度を実現することで高いパフォーマンスをたたき出しているのだ。

柳葉氏のトレードはプログラミング技術に支えられている——。この時点ではほかの人がまねることのできないもののだが、彼が20年かけてたどり着いた結論と、そこに至るプロセスは、すべて

の投資家が考え直してみるべき事柄を示唆していると思う。

私と彼のつき合いは10年以上になるが、今までは相場についてゆっくりと語り合うことがなかった。私がインタビューを依頼したすべての人が純粹に話を聞きたいと思う相手だが、このインタビューほど仕事の域を越えて楽しんだものはなかったと思う。

インタビューは2010年11月25日に、恵比寿のレストランで行った。

## 1. 大同毛織でやられた

——柳葉さんはたしか、学生時代から相場を勉強していたと思います。初めてのトレードは、いつだったのですか？

大学院生の時に講師のアルバイトをしていた塾の塾長が株好きで、その人の影響でトレードしたのが最初です。1987年だったはずですが。仕手株好きの人だったのですが、要するに80年代で株式市場が盛り上がっている時でしたから、熱く誘われたような感じでした。

——では、とりあえずその人の薦める銘柄を買ったとか？

いえ、言われるままにやるのはしゃくだったので、自分で研究してから実行しました。研究のた

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

めに池袋の芳林堂書店に行つて最初に手にしたのが、『投資の科学』という雑誌でした。そこで紹介されていたテクニカル分析のアプローチを基にいろいろと考え、値動きを中心に個別銘柄を観察して最初に選んだのが大同毛織（現ダイドーリミテッド）でした。日々のデータを見ながら、「出来高が急増して前日の5倍になったら買おう」といったように、純粋なテクニカル分析の手法でトレードを始めたのです。

——いきなりマニアックな本を手にしたのですね。当時ならば書店の目立つ場所に、例えば、特選銘柄袋とじみたいな本があったと思いますけど、最初から科学的なアプローチをしようとしていたのですね。

自分で工夫してみようという姿勢は良かったと思いますし、それが今の成功に結びついていると信じていますが、最初は損をしてショックを受けました。結果的には、仕手株好きの塾長の推薦銘柄とか袋とじ銘柄のほうが儲かっていたはずですよ。

——振り返ってみて、そのとき負けた原因は何だったのですか？

発想というか、アプローチそのものは間違っていないかと思えます。今でも当時と同じような単純なアイデアを基にトレードを組み立てて実行しています。

しかし当時は、タイムフレーム（時間軸）をきちんと考えていませんでした。時間が経過する中

で何が起るのか、どういう失敗があり得るのか——そういった現実の部分にまで考えが及んでいなかったのです。簡単に言ってしまうえば、経験が足りなかったということでしょう。

これは誰にでもいえることだと思いますが、儲かりそうなアイデアそのものはおおむね正しいのです。でも、そのアイデアをどう実装するのか、つまり具体的にどのような売り買いに落とし込んでいくのかという部分で間違いが起るのです。

株を始めた当時の私のアイデアでも、例えば1億円とか、自由に分割できる規模の資金で100銘柄に分散していれば、何の問題もなく勝っていたのかもしれませんが。

——当時の資金量はどれくらいでしたか？

最初は、100万円でした。初めて口座を設けたのは山一証券（以前の四大証券のひとつ）。1997年に自主廃業）だったので、信用取引の口座を持つには数千万円の資金が必要でした。ですから1回で買ってそれを手仕舞うという、単純なトレードしか行うことができませんでした。

——大学院生の時代は、ずっと同じ資金量だったのですか？

いえ、奨学金を少しずつ株の資金に回したので、途中からは数百万円規模でトレードを実践しながら研究を続けました。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

——奨学金ですか？ それって、学費に充てるお金ではないのでしょうか？

学費は親に出してもらっていたのですが、成績が良かったので金利なしで少しずつ返済すればいいという好条件の奨学金を受けていました。それを株の資金に充てたのです（笑）。もちろん自分で売買して利益を上げ、ちゃんと返済しましたけど。

——その数百万円の資金で、どんなトレードをしましたか？

大同毛織でやられたあと「これはいけない」と思い、再び芳林堂に通って本を探し、林輝太郎先生の本を見つけて読みました。わずかながらも経験を積んだので、数ある相場本を自分で分類し、上っ面の情報ではなく「相場師の質を極める」という方向性があるかどうかをポイントに判断したのです。

本を読みながら、いろいろなトレードテクニクがあることを知り、例えば分割で買い下がってみるとか、いろいろなことを試しながら研究しました。試行錯誤を繰り返しながらも次第に損をしなくなったので、もらった奨学金の分だけ着実に資金が増えていき、ある程度自由にトレードの研究を進めることができるようになりました。手法とともにトレードの対象も選択肢を広げ、商品先物もやってみました。

——私が柳葉さんに出会ったのは、そのころでしたか？

少しあとの、97年だと思います。林投資研究所の『研究部会報』は90年代の前半に読み始めて現在も読み続けていますが、パンローリング社長の後藤さんの紹介で人形町にあった輝太郎先生の事務所を訪ねたのは、96年でした。その時は、事前にトレードの経験などを後藤さんに伝えてもらったので、「おまえ、小豆でいくらやられた？」といきなり言われたのには、まいりました（笑）。

相場を始めた当時の柳葉氏は、わずかな経験から「正しい筋道」を探す段階に移ったのだと思う。本人は、初戦で損を出したあと「ワラをもすがら気持ちで本を読んだ」と語っていたが、持ち前の論理的な思考と行動力によって時間のロスをつくらずにプロへの最短距離を進んだというのが、私の印象である。

マーケットには、むちゃな売買をする人が多い。カネがからむから、ごくふつうの人が慎重に考えた結果、個人のレベルではムリだと思えないような売買をするケースが多い。そもそも、何の整合性もない売買をして、大きな損を出したあとでも、なぜ損をしたのかが理解できないくらい何もかもがバラバラな状態の人も少なくないと思う。柳葉氏は、そういった人たちとは真逆の道を進んだといえる。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

## 2. パラジウムから日経225先物、再び商品先物へ

——現在は超短期のトレードがメインですよ。こういった経緯で短期トレードに移行していったのですか？

ラリー・ウイリアムズ（アメリカの著名なトレーダー）の本を読み彼の影響を受けたのがきっかけですが、「短期トレードを数多くこなして利益を積み重ねる」という方向が決まったのは、97年ごろです。現在もそのまま実践していますし、この考えが理論的に正しいと整理がついているのですが、当時は直感でたどり着いた仮説でした。

短期トレードでほんのちよつとでも50%を超える勝率を確立し、トレード回数をとことん増やして満足できるパフォーマンスを実現する——こういう考え方です。

これは実際に利益が出ているので証明されていますが、人間の心理が働かない範囲、つまり計算上は、短期トレードでわずかながら50%を超える勝率を得ることが可能です。

——その後、トレードの対象は移り変わっていったのですか？

はい、いろいろなものを売買しました。本格的に短期トレードの実践に取りかかった時はパラジウムの日計りでした。値動きが荒いといわれていましたが、とにかく動く、流動性が高い、この2つの点で私が考える短期トレードを行うのに最適な売買対象だと考えたのです。さらに言えば、ラ

リー・ウイリアムズが提唱していたウップス（Oops）も検証してみた結果、有効だとわかったからです。

ほかに、ガソリン、プラチナ、灯油など、いろいろな銘柄を対象に日計りのトレードを続けました。

——単純な片張りですか？

はい、そうです。日中の動きをみながら分割してポジションをつくるといった工夫はありますが、サヤ取り的な発想は全くありません。単純なアウトライト（片張り）です。

——私の記憶だと、ある時期225先物の日計りを徹底的に行っていたと思うのですが。

しばらくパラジウムの売買を続けていましたが、2000年に極端な値動きで解け合い（注）になるなどの不安定な状況があったので、流動性が高く、かつコストな値動きがあった225先物に移行しました。

（注）解け合い／天変地異や仕手戦の激化などによって市場の收拾がつかなくなったとき、取引所や当局によって行われる非常措置。ポジションの一部または全部について一定の条件を定めて強制的に決済させる。（林投資研究所WEBサイト『実践！相場用語集』より）

——その後、トレード対象はどう変化しましたか？

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

225先物をやっていた時は、完全に225先物専門でした。しかし、いくつかの理由で商品相場に戻りました。まずは商品先物の委託手数料が1998年から段階的に自由化され、大幅に安くなったことです(2004年に完全自由化)。私が行う短期トレードを繰り返す手法にとっては、わずかな手数料の違いが結果を大きく左右します。

しかし手数料の値下げをきっかけに商品先物へ戻ることを積極的に検討したところ、ほかの点でも違いを確認しました。日経225先物のマーケットは価格形成が非常に洗練されていたのに対して、商品先物のほうは「スキがある」というか、少し不合理な価格形成があることから「より儲けるチャンスがある」と、あらためて考えたのです。それに、ちょうどそのころ日経225のボラテイルティが下がり気味だったこともあって、商品先物への再移行を決定しました。

超短期で、日銭を稼ぐトレードをしているので、月とか年という単位で市場を観察することはありません。その週稼げるか、その日稼げるか、という観点だけになります。ですからトレード対象を替えるときは、すばやく行動します。

——現在は株も手がけているようですが、商品先物に移行したあとの経緯は？

商品先物で安定した成績を出していたのですが、その記録を知り合いのトレーダーに見せたところ、「現物株でやってみたらどうか」というアドバイスをもらいました。もちろん過去の値動きデータを使って、徹底的に検証しました。そして、「もしかしたら、商品相場以上に自分のトレード

に適しているのかもしれない」と感じたのです。また株の手数料も下がっていたうえに、成績を安定させるためにトレード対象を分散したいという気持ちがありました。

結局、商品先物のトレードを続けながら、現物株も対象に組み入れました。林投資研究所の考えだとトレード対象の分散が否定される場面が非常に多いのですが、私の場合は人間の感覚を排除してトレードを執行するので、商品先物と現物株という組み合わせは単純に利益を安定させる効果が期待できる、ということでした。株と商品の値動きには、特別な相関関係がありません。「トレードチャンスが毎日ある」という状況をつかむには、非常に良いと考えたのです。

それに、すでにこの当時、かなり高性能の発注プログラムを組んでいました。つまり人間の能力を大きく超える発注能力、トレード回数がいくら増えても処理する能力があったので、トレード対象が増えることによるマイナス点はないと判断できたのです。

### 3. 創造性が損を生む

——大学院では、何を専門に勉強していたのですか？

大きな枠でいうと「電子情報学」ですが、その中の「確率応用論」が専門でした。確率とか統計に関するものなのですが、私がやっていたのは「待ち行列理論」というものです。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

例えば身近なもので、電話線を例に説明します。3台の電話が存在していて、それぞれがいつでも通じるように電話線を引くとすると合計で3本の線が必要です。次に4台で考えた場合、いつでもつながるようにするには6本の線が必要になります。数が多くなると、すべての電話が、いつでも通じるようにしておくのに、ものすごい数の線を設置しないといけないのです。これでは効率が悪いです、ある程度の数を束ねてしまいます。例えば3台の電話をひとつに束ねてしまえば、3台に対して1本の線ですみます。しかしこの3台を所有する3人のうち誰か1人が使っているときは、あとの2人は使うことができません。そのかわり、設備のコストを抑えることができます。実際にはネットワーク上での効率を考えます。多くの人が使っているNTTでは電話がつながらない確率——これを呼損率（こそんりつ）と呼びます——を、0.1%に設定しています。100%つながるようになるとコストが上がってしまうので、呼損率を0.1%に設定する、つまり「99.9%つながる」ようにするということです。

——なるほど、規模の大きなビジネスなどで使えることが想像できますね。卒業して就職したあとは、こういう知識と技術で仕事をしたのですか？

いえ、サラリーマン時代に仕事として行っていたのはニューラルネット、いわゆる人工知能系のものでした。人工知能というのは平たく言えば、コンピュータで人間の脳の機能をまねするというものです。

——人工知能というものを、わかりやすく説明してもらえますか？

私たち人間がやっていることを、単純に考えてもらえばいいと思います。入力とそれに対する正しい出力を与えてやって、新しい入力に対して最も間違いない答えを出すことができるように教えてやるのです。人間は常に新しい場面に遭遇しながら、過去の経験に基づいた判断基準によって最適な対応をしようとします。それと同じです。現在の最先端技術についてはわかりませんが、基本的なことは変わっていないと思います。

——人工知能は、新しいことを考えるようにはならないですか？

新しいアイデアを産むというのは、私が携わっていたものとは別の枠組みです。人間も多くのことについて、入力と正しい出力をセットで教えられて行動規範を作っていきますから、そういう意味で人間がやっていることと同じ、と表現しました。しかし人間は、そういう学びの範囲を超えた創造性を持っています。コンピュータと決定的に異なる部分なのですが、だから相場で損するようになっていっているのです。

——マーケットで行われているのは、ストレートに言えばカネの取り合いです。だから、「構造的に損するようになってきている」と考えることができますけど。

いえ、私が注目しているのは、人間の不合理さです。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

プロスペクト理論というものがありません。これは、リスクを伴う決定を人間がどのように行っているのか、という理論です。合理的な答え、つまり最適解ではなく、実際にどう感じてどう行動しているのか、ということです。

例えば2つの選択肢があつて、どちらも同じリスクとリターンだったとしても、大多数の人がどちらか一方を選ぶというように、人間は合理性だけでなく感覚的にもごとを判断しています。そして多くの場合で、誤った選択をします。合理的に考えるとどちらか一方が損というような状況で、大多数が損なほうを選ぶ事例がたくさんあるのです。

相場でも、このプロスペクト理論についていろいろな例を挙げることはできません。例えば、損失や利益を「どれだけ強く感じるのか」ということを考えてみます。最初の売買で10万円儲かって、次の売買で100万円儲かったとします。2回目の100万円は1回目の10万円の10倍うれしいのかというと、実はそうではないのです。儲かったのですからうれしいことには変わりありませんが、儲けの金額と実際に感じるうれしいうれしい度は、決して比例しないのです。

損をしたときも同じです。10万円の損も100万円の損も、どちらも精神的には痛いのですが、100万円の損は10万円の損に対して10倍の心の痛みがあるのかというと、それほどではないのです。

あと、利益と損失を同じように判断できません。人間は目の前に利益があると、それを確実に手に入れようとする傾向があります。より大きい利益を得るチャンスがあつても、目の前の利益を確実に手に入れ、さらなる利益のためのギャンブルを避ける人が多いのです。しかしそういった堅実

性を示す人でも目の前に損失があると、損失額をゼロにする可能性を手に入れるためにギャンブル性の高い行動を示す傾向があります。

こういった不合理さというか、知恵があるゆえの誤りというか、そういったものが弱さとして表面に出て悪い結果を生んでしまうのが、マーケットにおけるトレードというゲームなのです。

——人間の弱さが悪い結果を生むという点は、まさに相場技術論でも核心の部分です。しかし実際のトレードだけを見ると、相場技術をベースに職人的な売買をする方法と柳葉さんの方法では、まるきり異なります。多くの人には、完全に正反対のこのように見えるでしょう。

どういう説明が適切なのかはわかりませんが、マーケットで利益を上げようというのですから、本質的には同じなのかもしれません。だとすると、具体的な方法論に落とし込んでいくプロセスとどうか、その時の方向性が異なるだけなのでしょう。

比較はともかくとして、私のやり方はコンピュータトレーディングです。最初の発想には自分の感覚、つまり創造性や経験、あるいは好みといった要素が入っているのですが、そこから先はコンピュータの能力に限定して進めていきます。

過去データを使って検証する場合、職人の相場師ならチャートを手で描いてみるとか、それをじっくり眺めるのですが、私は自分の発想をプログラム化し、それを過去データにぶつけて数学的に検証します。注文の執行も、完全にコンピュータに任せます。そして売買の結果をチェックし

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

ます。

こういう作業に徹することで、人間の弱さによって損失が生まれる可能性をゼロに近づけているのです。

——人間の心理が入らないようにするためにコンピュータトレーディングを選択しているということですが、発想の段階では人間の心理をしっかりと考えているということですね。

はい、そうです。自分も含めて弱い心を持った人間が集まって売り買いを展開しているのが、マーケットという場です。そこで勝負しようとするのですから、どうやったら勝てるのかということについて、人間の心理をベースに考えています。

しかしトレードを執行する段階では、自分の感覚を全く入れないようにしています。自分の発想を、どうしたら人間の弱さが入り込まないプログラムとして実装するのか——それだけを考えてコンピュータで作業します。

柳葉氏は、いわゆるコテコテのコンピュータトレーディングを行っているが、根本の発想は極めてシンプルだ。簡単にまねることができないことはわかっているものの、一般的な人間が彼の頭の中をのぞき見る「すぎ間」がどこにあるのかと考えた。

実際に売買に使うもの、言い換えれば最終形は林投資研究所が提唱しているアナログ的な売買とはかけ離れている。しかし相場に限らず、あらゆる分野のあらゆる作業はアナログとデジタルの融合ではないかと、私は考えている。実際に柳葉氏も、彼自身のアナログ的な発想や感覚から作業をスタートさせているし、プログラミング作業において数多い選択肢から進む道を選んでいく過程も、もっぱらアナログ的なはずである。

こんな観点を大切にしながら、自分が考えているアナログ売買と彼のコンピュータトレーディングの共通点はあるのか、あるいは相違点をどう説明できるのかなどを探りながら、2006年のライブドアショックでは3日間で1億7000万円の損を出した経験などを経て強固になった、彼独自の哲学を説明すべくインタビューを進めた。

#### 4. 3日間で1億7000万円の損！

——トレード対象の変遷があったようですが、現在の対象は？

先ほど言ったように、常に日々の利益を大切にしています。「今日、儲けたい」とか、トレードしながら「夕方までに儲けたい」という発想です。デイトレードなのだから当然でしょうが、日々の利益を確保するために、ためらうことなくトレード対象を替えていきます。それに、「これをや

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

りたい」といったこだわりはありません。

ちなみに去年までは、利益の割合でいうと株が7割、商品先物が3割くらいでした。2003年に個別株のトレードを始めてからは株がメインですが、同時に複数のトレード対象を手がけるといふスタイルです。

でも商品先物は市場があまり大きくないので、私の資金量が増えたことによって市場に対する私のトレード規模が大きくなりすぎました。例えば、コインで最高250枚くらいのポジションを持ったこともあります。それを1日でドテンしたこともありますから、同じ商品会社から合計500枚の注文が出るわけです。私の注文そのものが値動きに与える影響もありますし、ちょっと目立ちすぎるようになってしまいました。なので現在は、商品先物をやっています。

——日経225のオプションはやらないのですか？

考えたことはありません。というか、価格形成がよくわからないというイメージが先行して、研究したことがないというのが正確な答えです。でも、おもしろそうですね。私なりにオプションならではの優位性を見つけられるかもしれないので、検証してみるのもいいかもしれませんね。私の手法だと、売買対象の違いは問題ありませんから。

——柳葉さんはかなりの利益を積み上げてきたわけですが、どんなふうが増えてきたのかを聞か

せてください。

知り合いのトレーダーのアドバイスで個別株を始めたのが、2003年でした。学生時代に初めてトレードしたのも個別株ですが、2003年には現在のコンピュータトレーディングのカタチが出来上がっていましたから、学生時代とは全く別のアプローチでした。

その時点ですでに、かなり安定した利益が出るようになっていました。そして2003年はちょうど株が上がり始めた時期だったので、それまでの十数年の経験から確立したノウハウが一気に大きな金額の利益として返ってきたのです。2003年の半ばで資金が1億円を超え、林輝太郎先生にお祝いの食事を開いてもらい仲間たちが集まってくれたのが、その年の秋だったことを覚えています。

——そこから一気に、資金が増えていったのでしょうか？

はい、2004年も順調に利益を上げ、税金を払ったりしたあとの目に見える現金が年末で2億円ちょっとでした。そして翌2005年は、かなりの利益を出すことができました。年末には、税引き前の資金が5億7000万円になっていました。この時、「一生、働かなくても暮らしていける」という考えが頭に浮かびました。実際にそうしようと考えたわけではありませんが、そういう選択肢もあるということに気がつき、株を始めてからの道のりを思い返しながらいついにここまで来た！」というような感慨深い思いでした。

——そのまま順調に進んだのですか？  
いいえ。その後すぐ、2006年1月のライブドアショックで大変な目に遭いました。

——ということはロングのポジションを取っていた、つまり株を買っていたわけですね。  
はい、そうです。基本的に株は「買うもの」だと考えています。「儲かれば何でもいい」のですが、株というのは企業が発行する利潤証券です。企業は継続的に事業を行い利益を上げて株主に配当する、成長を前提に存在しているというのが原則です。だから私は、株は買うものだと考えて、個別株のトレードではロングのポジションしか取りません。

——ライブドアショックは、2006年の1月16日に東京地検の強制捜査が入って、翌日の1月17日からの暴落でしたね。どれくらいのポジションを持っていて、実際にどれくらいの損が出たのですか？

オーバーナイトで7億円を超える買いポジションを持っていました。だから毎日、かなりの金額の損が続いたのです。結局、1月17日、18日、19日の3日間で、合計1億7000万円の損を出しました。

——そこで、どう考えましたか？

まず、何が起こっているのかわからない状態でした。「頭が真っ白」という感じでしたね。でも実は、前年の2005年12月だけで1億円の利益を出していましたし、2006年の初めからライブドアショックの直前までで約7000万円の利益を出していたので、「去年の11月の状態に戻っただけ」と考えることができました。もちろん1日の損が、5000万円、7000万円：と続いたのですから、冷静ではいられませんでしたけど。

——突発的なトレンドの変化があったのですから、うまくいかなくても当然かもしれませんが、根本の発想とかシステム化の過程に見落としがあったのでしょうか？

振り返ってみて、そうではなかったと思います。その時も「まだ年の初めだし、手法を変えずに続けよう」と決断しました。ただ実は、自分が決めたルール通りにトレードしていたならば、暴落による損は9000万円ちよつとですんでいたはずなのです。しかし自分が決めたルール、つまり自分の手で作ったシステムの答えに、自分の裁量を入れてトレードしてしまったのです。すべて自分でやったことなのですが、想定できなかったヒューマンエラーといえるのかもしれない。

——通常よりも大きなレバレッジをかけていたのですか？

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

いえ、それはありませんでした。レバレッジはかけていましたが、いつも通りのトレードサイズでした。

——自分の裁量は、どれくらい入れるのですか？

裁量は、普段はほとんど入れません。ライブドアショック以前も裁量はあまり入れていませんでしたし、現在はほぼシステム通りのトレードだけを実行しています。ライブドアショックの時は、いろいろな意味で焦って行動していたのだと思います。

——2006年は結局、マイナスの成績で終わったのですか？

年末にはプラスになりました。株の収支が10月にプラスに転じ、その年の累計利益は1億3000万円でした。株が大きなマイナスから始まったので、商品相場による利益がそのうちの約4割と、いつもの年よりも商品相場の利益の比率が高くなりました。

——すごいですね。その後の成績は？

とても順調です。2007年が2億7000万円、2008年と2009年がそれぞれ、1億4000万円から1億5000万円くらいの利益でした。

——ざっと足し算しただけで、10億円を超えますね。では現在の資金は？

手持ちの現金は現在、3億円を少し超えるくらいです。利益で不動産を買ったりしていますから。お金は使わなければ意味がない、と考えています。

でも今年是不調なのです。現時点(2010年11月25日)で、今年の累計利益は2000万円です。プラスにはなっているのですが、生活レベルを上げてしまっているのが、実質は赤字です。でも、ここで自分の裁量を入れてパフォーマンスを上げようとか、そういう発想はありません。メインの部分はひたすらシステム通りにトレードを続け、あとはシステムそのものの見直しをするかどうかという選択肢を考えるだけです。

——柳葉さんは現在、独立した専業トレーダーです。サラリーマン時代からの経緯を聞かせてください。

会社を辞めて完全に独立したのは、2005年5月です。それまでは、サラリーマンの立場で仕事をしながらコンピュータトレードを行うという状態でした。

——仕事に支障はなかったのでしょうか？

特に問題はありませんでした。日中は機械任せのコンピュータトレーディングなので就業時間内に値段を見たり注文を出していたわけではありませんでしたし、研究やトレードシステムの開発で

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

寝不足になって会社で居眠りするようなことも、もちろんありませんでしたから。

——現在は、個人の勘定で売買しているのですか？

現在は、法人勘定と個人勘定の両方で売買しています。2004年に設立したトレードのための個人的な会社と分離課税の個人勘定を使い分け、納税が合理的になるように工夫しています。

——2004年ということは、サラリーマン時代ですね。会社から何か言われたことはありませんでしたか？

一部の人から「問題だ」という声が上がったことはありません。でも自分の仕事はきちんとこなしていましたから、正式に雇用契約の問題となったわけではなく、最終的には全く問題なしと認められました。金額が大きかったというだけで、昼間の業務とは完全に分離していましたから。一般的なサラリーマンが、ケータイで株価をチェックしたり注文を出すことがありますよね。サラリーマンとして会社の仕事をする、就業時間はほかのことをやらない、といった点では、私のほうがはるかに優等生サラリーマンだったはずですよ。

——それならば、会社を辞めずにトレードし続けるという選択肢もあったと思います。

そうなのですが、2003年から利益が膨らみ始め、ついにはトレードの利益がサラリーマンとしての年収の10倍に達したのです。このギャップを確認したことで、いわゆる脱サラを決心しました。退職したのは2005年5月なので、自分のトレード会社を設立した2004年4月から2005年5月までは、サラリーマン兼トレード会社の運営者、という立場でした。

## 5. 私にとって、相場は難しいものなのです

——先ほど「短期トレードでほんのちょっとでも50%を超える勝率」と言いましたが、この部分  
が私は納得できません。回数が多い分だけ、手数料で不利になると感じるので。

長期でも短期でも、勝率が50%を超える法則はあり得ます。それを見つけて実行できるかどうか、という問題です。

次に、短期トレードに限定して説明します。日計りだけだと、トレードのタイムフレームは常に1日です。ふつうに考えれば勝率は50%で、損も利益も限定的な範囲に収まります。その中で自分の戦略を決めれば、損を限定することができます。手数料が非常に安くなったことによって、無視できるレベルだとは言いませんが、十分に勝てる戦略を作ることができるのです。結果として利益を伸ばすことができ、勝率50%を少しだけ超えるやり方にたどり着くことが可能なのです。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

——なるほど、なんとなくわかるような気がしますが、実際にはスリッページの問題があるので、  
は？

確かにザラ場では、売りと買いで1文の食い違いが生じます。気配が1カイ2ヤリならば、売つたら1円で買ったなら2円です。言うとおりの、不利な要素が生まれます。しかし私が検証したところ、FX取引では勝てるシステムを作るのは難しいのですが、個別株や225先物、あるいは商品先物ならば十分に可能です。それに、大引の成行ならばスリッページは生じません。疑問のポイントはわかりませんが、総合的に考えて決して不利なことではないのです。理論的には、ということですけど。

——短期トレードを繰り返すことによる混乱は？

一般的な人が深い考察なしで短期トレードを行えば、必ず混乱すると思います。だから、やたらと手を出すものではないという意見には賛成です。しかし、私が行っているのはコンピュータトレードイングです。なので、人間の心の弱い部分をほとんど考慮せず、トレードを数多く繰り返した場合にどうなるのかという点を理論だけで掘り下げていくことができます。

——人間の感覚を中心にトレードし、感覚を維持したり調整するために休む期間をつくる、これが万人向けの負けない方法だと私は思っています。しかし柳葉さんの手法だと、そういう懸念は無くなってしまふのですね。

そうですね。休むという概念は、私の手法では考えられません。逆に、「どれだけ回数を増やすか」「年間でどれだけ多くのトレードを実行するか」が重要です。

相場をじっくりと観察し、感覚的にも理論的にも納得できる場面に絞って出動すると、例えば1年間に10回出動したとしても10年で100回と、頻度的にはかなり少なくなります。それに対して超短期で小幅の利益を狙う場合、1年に1万回とか、かなりの頻度になります。人間の弱い部分を考える必要がなければ、トレード回数を増やしたほうが結果に対する信頼性が高まる、という結論です。

——信頼性ですか？

「結果に対する信頼性」です。

コインを投げたとき、裏が出る確率も表が出る確率も等しく50%です。でも、たまたまの結果で裏ばかり続くことだってあります。これが実際のトレードだったら、どうなるかということ。50%の確率だと思って実行したのに裏が3回続いた場合、「これはダメだ。裏が出る確率が異常に高いのかもしれない」と考えてしまうでしょう。50%の確率だと確認するためには、試行回数が多くなければなりません。

経験が多くなるというのも、プラスの面です。実際のプログラムとして実装する手前の段階では、感覚とか思いつきとかいうか、人間くさい発想もあります。トレード回数が増えれば、実際のトレード記録と経験を短い期間で増やすことができるので、良い発想を生むことにもつながります。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

一定の条件がそろえば、短期トレードの有利さを十分に享受することができるのです。

——チャートを描くことはありますか？

チャートは描きません。過去データを使った検証や現時点でのパフォーマンスのチェックなど、そういったことが作業の中心です。

でも相場を始めたころにさまざまな研究をしていた段階では、とにかくチャートを夢中で手描きした時期がありました。それこそ寝る時間を削って、たくさんチャートを描きました。

——そこから、何をつかみましたか？

私は変動感覚というものを理解できない、という結論です。感覚や好みを重視して、トレード対象や出動の場面を限定すれば、結果として精度が上がります。しかし、自分にはそれができない。だったら精度が低くてもいい、自分に合う方法はないかということで、コンピュータトレードに行き着いたのです。わずかでも50%を超える確率を得ることができれば、トレードを数多くこなすことで利益の額を確保することができます。

例えば林輝太郎先生にとって、相場はやさしいものなのかもしれません。どんな場面にも通用するとか、どんなトレード対象にも合う方法を持つとうとするのではなく、自分の得意技を使って利益を出すことができる1銘柄だけに限定し、なおかつ出動する場面も限定するわけですね。そして、

取れるところでしつかりと利益を取って休む。ある意味、単純明快です。

でも私にとって相場というものは、とても難しいものなのです。銘柄を1つに絞った時点ですべてがギクシャクしてしまい、安定した利益なんて想像すらできず、「インサイダー情報しか儲ける方法はない」くらいの考えになってしまいます。ですから、精度の低いバカなやり方でもいい、たとえ51勝49敗でもいいから、それを1万回繰り返せばいいのだと考えました。

「職人的に行動範囲を絞り込んで1人で1億円稼ごう」という姿勢に対して私は、「1万円しか稼げない配下を1万人持とう」と考えたわけです。実際に人を雇うには、相場とは関係ない管理術とか経営のセンスなどが必要です。でもコンピュータトレードイングならば、仮想の部下をほぼ無限に持つことができます。

私にとって、相場の世界は過酷すぎるのです。自分だけの力で結果を出すことはできません。

「プログラムでトレードする」と強調する柳葉氏には否定されそうだが、彼自身の持ち味を前面に出した、とても人間らしい創造的な作業が行われているように思う。マーケットを取り巻く環境が大きく変化しているが、根本の部分は変わりようがない。だからといって伝統的な考え方に固執するだけでは本意な盲点が生まれ、伝統を守って進化させていく道が閉ざされてしまうかもしれないという考えが頭に浮かんだ。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

すべてを教わる気持ちでインタビューを続け、柳葉氏が使っている自作プログラムについて話を聞いた。

## 6. シンプルなルールが良い

——柳葉さんが行っている発注プログラムについて説明してください。

難しいことはありません。インターネット経由で注文するとき、数量や指し値などの条件を画面に入力して送信ボタンをクリックしますよね。その入力やクリックの作業をプログラムにやらせる、つまり自分の手を動かさずに、あらかじめ決められた数値を自動的に証券会社に送信するプログラムを作って、それを動かしているのです。

——「自動売買」という言葉が一般的になってきましたが、ふつうの個人投資家が利用可能なツールも多いのでしょうか？

私はすべて自分の手で作っているのですが、一般的なソフトについては詳しくありません。でも、例えば日経225先物ならばトレーダーズ証券の「トレードスタジアム」とか、証券会社が提供する自動発注システムもありますし、少し勉強すればある程度のもが誰にでも作れる時代になったと思います。

思います。

——柳葉さんは、自動発注のツールが無かった時代から自作のプログラムでコンピュータトレーディングを行ってきたわけですが、コンピュータ環境が良くなって同じような手法を利用する人が増えたから不利になったということはありませんか？

特に感じたことはありません。証券会社やヘッジファンドが取引所内に自分のサーバを設置して自動売買を執行する、コロケーションサービスもあります。そういったシステムは当然、私のシステムの先にいるわけです。手数料が安くなったこと以外にもいろいろな要因があって、短期トレードを行う人の数は増え、層も厚くなっています。しかし値動きの本質的な部分を見ると、市場の動きを素直に観察して儲かる法則を探す姿勢でいけば、あまり関係ないと考えています。また、私は細かい部分については鈍感で、超短期トレードの駆け引き的な部分は見えていません。

ただ今後、どういふ変化が起こるのかはわかりません。状況によっては根本から見直す必要が生まれるのかもしれませんが。

——システムの細かい見直しなどは、トレードの結果を見ながら常に行っていることですか？

超短期の優位性を見つけてトレードするのですから、その優位性は時間の問題で消滅します。相場技術論のように「価格は上がったたり下がったりする」と片づけて、あとは個人の技術でカバーし

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

ていく、というやり方ではありません。常に新規開拓していくことが要求されます。

——最終的には儲かる自動売買プログラマーを実行するだけということですが、最初の発想が実際の売り買いにつながるプロセスは？

最初に立てる仮説、つまり「こうやると儲かるのではないか」という思いつきが安定した利益になるのかどうかは、徹底的に数学的に分析するだけです。もちろん自動発注プログラムに実装する際も、プログラミング能力を使って単純にトランスレートするだけです。

——では、そういったプロセス全体がコンピュータトレーディングのパフォーマンスを決めるという理解で正しいのでしょうか？

はい。先ほども言ったように、「儲かりそうなアイデア」はおおむね正しいのです。でもその先にある分析とプログラムへの実装、つまりコンピュータ技術を駆使した作業が難しいのです。

実践家が出している本で、意外なものを見つけたことがあります。本人は「秘密にするほどではない」と考えて書いてしまっている短期の法則で、実はそれを実行するだけでかなり儲けることができました、という実例です。本当はすごいのに、本人にはそのすごさが理解できていないということです。検証が甘いといったことが原因でしょうね。システムトレードにおいて、分析・検証の方法論はとても大切なことなのです。

——さらに明確になってきました。柳葉さんは、自分の好みといった要素を入れないようにしているのですね。

そうです。自分のこだわりを実行段階のルールに入れない、経験から生まれた美学みたいなものを入れないように努めています。とはいえライブドアショックの時みたいに、余計なことをしてしまうこともあります。また誰にでもあるような、年に数回のヒューマンエラーはあります。ただ最近、それがほぼゼロになったと感じています。売買を始めてから20年かかって、ようやくそんな感触が得られたと自分では思っています。

先ほど、人間の弱い部分ということでプロスペクト理論の話をしましたでしたが、トレードの途中でもいろいろと不合理な気持ちが生れます。ポジションを維持したままでいて、一時期は10万円あった評価益が5万円に減ったとき、「10万円の利益を確定するチャンスがあったのだから、5万円では納得できない」という気持ちになります。そんな意味のない結果論ではなく、将来だけを見据えたその時点での最適な答えを見つける思考が必要です。私にはこれが無理だから、機械任せにしておこうということなのです。

とにかく、「儲かれば何でもいい」のです。「勝てば官軍」という考えに基づいた「ヘタな鉄砲も数打ちや当たる」で問題なし、と考えてパフォーマンスの安定性という結果だけを求めています。

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

——そういえば、中源線建玉法を研究・実践していた時期がありましたよね。中源線の、どこがおもしろいと感じたのですか？

最初は、陳雅山（ちんがざん）の伝説に惹かれました（笑）。でも、中源線のトレンドフォロという点が優れていると思います。ルールを基に人間の感覚を加えて使うべきだという説明がついていますが、中源線を単純に売買システムとしてとらえたとき、トレンドフォロのシステムだというのが大きな特徴ですし、実際に検証してみても儲かるシステムだと確認できました。

——トレンドフォロのシステムが有利なのですか？

中源線のほかにもさまざまな手法を研究して、トレンドフォロの優位性を強く認識しています。私は今でも、トレンドフォロを基本にしてコンピュータトレーディングを実践しています。ただルールはシンプルなほうがいいと考えていますから、中源線そのものを使っているわけではありません。

——中源線は、複雑なのですか？

いや、中源線のルールを理解してチャートを手描きして見ていけば、転換を直感的に察知することができますよね。そうやってアナログのアプローチで使っていれば、慣れたあとは簡単です。しかしプログラミングを考えた場合、中源線のルールは複雑なのです。

## 7. 何もやらないのがベストかもしれない

——柳葉さんと同じような努力は、一般の人にはできません。多くの個人投資家に向けたメッセージがあったら、お願いします。

中途半端にやるのならば何もやらない、つまりマーケットにかかわらないことがベストではないでしょうか。

専業トレーダーではない人があえてやるのならば、無理なく実行できる範囲に限定することです。研究や実践の時間をしっかりと取ることができないのに、FX取引や個別株の日計りなどの厳しい環境でトレードを繰り返している人が多いようです。そんな難しいことをやるよりも、優良で安い個別株を、配当狙いの無期限コールオプションを持つような感覚で保有するとか、そういった取り組み方を考えるのもいいのではないのでしょうか。「トレード」ではなく、成長を前提とした企業に「投資」するという色彩を強く持つかかわり方です。例えば林投資研究所のFAI選定銘柄を安いときにゆっくりと仕込むとか、そういった方法は非常に有効だと思います。利益の額が限られてくると思います。それでも十分に満足できる利益を確保することが可能ですし、まずは確実に勝つという方向性が生まれます。無理な売買をしてしまったら、せっかくの「儲かりそうなアイデア」も儲かる方法として具現化しません。

私も相場を幅広く研究していた時期に、FAIクラブの選定銘柄を売買したことがあります。株

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

価の季節的変動として、年末から年始に安い傾向があります。この傾向に着目し、年の初めに買って5月の連休あたりで売るといった戦略を実行したので。

こういった売買を私はシステムトレードと言いつきませんが、一般的な感覚からすれば十分にシステマティックな方法だと思います。行動が限定されることで実行しやすくなるのか、あるいは自分の考え方ややり方を別の視点から観察することにもつながります。

私自身は相場技術論のアナログ的志向で相場を考えているが、柳葉氏は別の立場で相場を考えている。ではそれぞれが全く相いれないのかというと、そうではないと思う。「アナログ」「デジタル」の定義は、実際には難しい。しかし前述したように、どんな分野のどんな考え方も、アナログとデジタルの融合だと私は考えている。今回はこの「アナログとデジタル」という観点でインタビューを行い、結果としてたくさんのお見聞があった。

柳葉氏は自身のことを、「変動感覚というものを理解できなかった」「相場師的なセンスがない」と語ったが、自分を過小評価しているように感じた。私だけでなく、周囲で同じような意見を言う人もいる。

コンピュータトレーディングに徹しているのが、柳葉氏の特徴である。しかし柳葉氏がトレードを「機械任せ」にしたからといって、創造的な作業がゼロになるわけではない。この点について彼

は、「自分で選択する場面はあるけど、たまたま良い判断をすることができた」と軽い説明で片づけていた。これも、彼が自分自身を過小評価していることの表れだろう。コンピュータトレーディングを実行しながら徹底した検証を行うことで、一連の作業をコントロールしている柳葉氏に適切に判定する直感が生まれ、その力が経験によって維持・発展しているのではないだろうか。

柳葉氏は自身のコンピュータトレーディングを、「精度の低いバカなやり方」などと説明したが、分析能力とプログラミング能力という最大の強みを生かす積極的な取り組み方である。人間の心は弱いし、不合理な判断をしがちだ——柳葉氏の売買も相場技術論もこの考え方を出发点にしているが、柳葉氏の手法は強みを出すことで弱さをカバーしているのに対して、相場技術論のように「休みをつくって頭をリセットする」というのは、強みを生かすことよりも弱さを出さないように工夫する、いわば消極的な姿勢だといえるのかもしれない。しかしいずれも、継続的な結果を出すために考え出されたものであり、それぞれが発想から具体的な方法論まで一貫しているのだ。

柳葉氏は、「儲かりそうなアイデアそのものはおおむね正しい」と言った。徹底したコンピュータトレーディングで見事な結果を出している彼の言葉を信じ小さな思いつきを捨てずにやり通すことで、読者自身の強みが成功につながるかもしれない。

【書籍の後半には柳葉氏の追加インタビューもあります】

[このコンテンツは著作権法で保護されています]

[このコンテンツは著作権法で保護されています]